

青年期女性における親性準備性と内的作業モデルの関連

松本 奈巳¹・重橋 のぞみ

Relationship Between Parental Readiness and Internal Working Model in Adolescent Women

Nami Matumoto · Nozomi Jyubashi

【問題と目的】

近年、少子化が問題視されている（厚生労働省，2014）。次世代育成支援では、少子化対策のひとつに、親になるための出会い・ふれあい、子どもの生きる力の育成と子育てに関する理解の促進など、次世代を育む親となるための支援をあげている。つまり、子どもを育てている親だけではなく、親になる前段階にある思春期・青年期にも焦点を当てた支援が盛り込まれている。その背景には「育児の学習」ができていく社会状況（川瀬，2010）、親になる前に乳幼児との接触体験がない人の増加（五十嵐，2011）、児童虐待の増加（瀧川・中見・桂田，2012）がある。平成25年度中に全国の児童相談所が対応した児童虐待の相談件数は73,765件であり、過去最多の件数となっている（厚生労働省，2014）。このように、育児学習のできない社会環境により生じる問題を減少していくための一つとして、親となるための資質を学習・育成する親性準備性が重要視されてきている。

親性準備性とは、親になる前段階である中・高校生そして青年期を対象に、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質について研究される中で生まれた用語である（小池，2013）。我が国では、1982年に岩田らによって初めて「親準備性」という概念が示され、定義は「望ましい親行動の遂行に必要なプレ親期（青年期）における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態」としている。それ以来、親になる準備段階にある青年期の男女を対象として、親になることへの意識や態度、子育てに対する知識などについての研究（中嶋・後藤，2009）が行われてきた。その中で乳幼児に接した経験や子どもへの好意感情が親性準備性に肯定的な影響を及ぼすことが指摘されてきた（岡本・古賀，2004；川瀬，2010）。我が子を持つまでに子どもに触れたことがないという親が60%と20年で急増しており（厚生労働省，2011）、このような結果からも親性を育てる機会を持つことは社会的にも必要なことであろう。

しかし、これらの先行研究では、「将来子どもを育てるための資質」「養育役割」という側面から主に親性準備性を捉えており、子どもへの関心や興味を中心に検討

が行われている。一方、青年が親になることに対する価値や心理状態、心理的意識に焦点を当てて親性準備性を検討したものは少ない。青年のどのような心理状態が、親性準備性に肯定的な影響を与え、ひいてはより安定した親性準備性を獲得しやすいかが明らかになれば、心理的に安定し成熟した親になることへの手がかりとなるのではないだろうか。また、「親性」は「親準備性」「母性準備性」「養護性」など、さまざまな言い方で呼ばれており、定義の仕方も1つではない。先行研究の多くは親性準備性を養育役割や親になることを前提としており、「そのための準備」として捉えている（平田，1999；岡本・古賀，2004）。しかし、近年では晩婚化や既婚女性の就業率の上昇など、多様な生き方が容認されており、ますます少子高齢化になると言われている。今後は我が子だけを育てる親性準備だけではなく「社会全体で子どもを育てる」視点から親性準備性を育成することも必要になるであろう。伊藤（2003）は、親性準備性を「生涯発達の見点から親になってもならなくても健全な次世代を育てる子育てを支援する社会の一員として備えるべき資質」とし、養育役割だけに限定しない定義をする必要性を示唆している。以上を踏まえ、本研究では親性準備性を「次世代を育成する意識を有する心理的『親』の準備状態」と定義し、我が子に対する親性だけではなく一般的な乳幼児に対する心理的感情として捉えることとする。

ところで、先行研究より幼少期の親子関係が親性準備性に影響をもたらすことが明らかとなっている（五十嵐，2011；寺尾，2012）。一方で成人期の他者への愛着スタイルが親性準備性に影響を与えるという指摘もある（小池，2013）。虐待の世代間伝達の研究は、母親の内的表象に注目し、過去に虐待を受けた「事実」よりも現在の受け止め方が重要だという指摘があり（鶴飼，2000）、幼少期の親子関係に対するその後の認知の仕方が親準備性不全につながる原因とも言われている（諸井ら，2013）。このことは、過去の親子関係が不安定的であっても、現在の愛着スタイルが良好であれば親性準備性を備えられる可能性を示唆している。つまり、現在の愛着スタイル（内的作業モデル）が親性準備性に影響を与える可能性がある。

Bowlby (1969) は母と子の情緒的絆を愛着 (アタッチメント) と呼び、アタッチメントは成長とともに行動レベルから表象レベルへと変化し、個人の内的表象として形成されると述べている。内的作業モデル (Internal Working Model : 以下 IWM と表記) は、このように幼少期に愛着対象との持続的な相互交渉を通して、人の内部に形成される愛着対象と自己に対する心的表象のことである。愛着対象に関する IWM は、愛着対象への接近可能性や愛着対象の応答性に関する表象モデル、また自分自身に関する IWM は、自分が他者から受容され助けてもらえる種類の人物であるかどうかの表象モデルであり、この二つは、相補的に発達し新しい状況や関係の中でも象徴的に機能することで、より一般性をもった関係性のモデルとして後の対人関係に寄与するようになると言われている (Bowlby, 1969)。

IWM における従来の研究では、早期のアタッチメント経験を基礎とする IWM の構成が、その後の人生にきわめて重要な意味を持つと考えられてきた (Bowlby, 1969 ; Hamilton, 2000 ; 青柳・酒井, 1997)。しかし、IWM の変容に着目した研究も行われている。内田 (2014) は、青年期の約 5 割の調査対象者において、IWM そのものが児童期以降の様々な人との出会いを通じ変容しようと指摘している。田邊・米澤 (2009) は、現在子育て中の母親における被養育経験を調べ、IWM の可塑性を示唆している。養育者の IWM が安定的なものに変容するならば、養育者の被養育経験に関わらず、IWM を安定的なものに築いていくことは可能だろう。

幼少期と青年期 2 つの愛着スタイルと親性準備性の関連を見た研究は小池 (2013) のみである。小池 (2013) は、青年期女性を対象に、幼少期と成人期の愛着スタイル別に親性準備性に与える影響を検討している。その結果、主に成人期の愛着スタイルが親性準備性を予測することを明らかにした。しかし、この研究では幼少期から青年期への愛着スタイルの変容パターンと親性準備性との関連は見えていない。IWM が青年期の親性準備段階で安定できれば、幼少期に不安定な愛着スタイルを形成した人であっても、親の立場に移行した際に子どもへの適切な関わりを行う手がかりを得やすいのではないだろうか。養育者の IWM は臨床場面でも重要視されており、養育者の IWM が養育に大きな影響を与えていることが明らかである。被養育経験に関わらず安定した IWM と親性準備性を共に獲得することは、負の世代間伝達を断ち切るための手段の一つとなり得るだろう。

そこで本研究では、幼少期から青年期にかけての IWM の変容によって心理的親性準備性のあり方に差があるかを検討する。なお、本研究で扱う幼少期とは先行研究を参考に (内田, 2014)、幼稚園・保育園時～小学校 2 年生頃までとする。

<仮説>

1. 幼少期・青年期ともに IWM が安定型の場合、一般的に親性準備性が高い。
2. 青年期に IWM が安定型に変容した場合、親性準備性を構成する因子の内、いくつかの得点が低い。
3. 幼少期・青年期とともに IWM が安定型ではない場合、一般的に親性準備性が低い。

<方法>

調査協力者 親性準備性の尺度作成のため A 県 A 大学 129 名を調査対象とした。IWM と親性準備性の検討では、B 大学 104 名を加え、回答不備を除く計 216 名を分析対象とした。

調査時期 2015 年 7 月と 11 月に実施した。

調査方法 大学で行われている講義で質問紙を配布し、回答後、その場で回収した。予め調査目的を説明し、研究への協力に同意をした者を対象とした。なお、調査は無記名回答で任意であること、回答の拒否や中断は可能でそれによる不利益は生じないことを質問紙の表紙に明記し、口頭でも説明した上で調査依頼を行った。

質問紙の構成 質問紙は、(1) フェイスシート、(2) 成人版愛着スタイル尺度、(3) 心理的親性準備性尺度、(4) 就学前母子関係尺度から構成される。

(1) フェイスシート 年齢、性別を問う項目からなる。
(2) 成人版愛着スタイル尺度 詫摩・戸田 (1988) の成人版愛着スタイル尺度を使用した。3 つの愛着スタイルを捉え (安定型、回避型、アンビバレント型)、各愛着スタイル傾向の強さを測定し、個人内での相対比較によって愛着スタイルを類型化するものである。項目は「知り合いが得意やすい方である」などの 18 項目で、「普段の対人関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方」に対して回答するよう求めた。回答は「1 全くあてはまらない」から「5 とてもあてはまる」までの 5 件法である。

(3) 親性準備性尺度 服部 (2008)、西田・諸井 (2010)、小池 (2013) の親性準備性尺度を参考にした。服部 (2008) の質問紙は、青年の親になることへの意識を評定する 43 項目 5 下位尺度、西田・諸井 (2010) は個人的特性としての親性準備性を測定する 30 項目 4 下位尺度からなる。小池 (2013) の質問紙は、「育児への積極性」に対して個人の感情、価値観や認識の面から詳細に捉える 30 項目 5 下位尺度からなる。

本研究では、子どもへの好意感情と親になることに対する価値や心理的意識を測定するため、各尺度から項目を選定した。臨床心理学専攻の大学院生計 6 名が項目の重複を協議した結果、質問項目は 45 項目となった。評定は「1 全くあてはまらない」から「5 とてもあてはまる」までの 5 件法である。

(4) 就学前の母子関係尺度

幼少期の親子関係をたずねる項目として、酒井 (2001) の就学前の母子関係尺度を用いた。項目は「私は母親の前では安心感があつた」など16項目からなり、下位尺度は「安定的」「拒否的」「アンビバレント」な母子関係の3つである。幼稚園・保育園児までの小さい時を振り返った時にあてはまる程度をたずねる振り返り調査で、回答は「1全くあてはまらない」から「5強くあてはまる」までの5件法である。

<結果>

質問紙の因子分析

成人版愛着スタイル尺度 主因子法による因子分析を行った。スクリープロットの固有値の変化より、3因子解が妥当であると考えられた。3因子を仮定して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、因子負荷量0.4未満の3項目を除外した。因子負荷量0.4未満の項目がなくなるまで因子分析を繰り返し、最終的な因子パターンを決定した。因子別の項目は先行研究とほぼ同様であったため、因子名は第1因子「安定型」、第2因子「アンビバレント型」、第3因子「回避型」とした。

親性準備性尺度 主因子法による因子分析を行った。スクリープロットの固有値の変化および解釈可能性より、5因子解が妥当であると考えられた。5因子を仮定して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、因子負荷量0.4未満の11項目を除外した。さらに因子負荷量0.4未満の項目がなくなるまで因子分析を繰り返した。最終的な因子パターンを表1に示す。

第1因子は「幼い子どもと遊ぶのが好きだ」「幼い子どもの姿をつい目で追っていることがある」など、子どもに対する関心を示す項目で構成されていたため、「子どもへの興味・関心」と命名した。第2因子は、「親になることは子どもに愛情を持ち大切に育てることだと思う」「親になることは子どもの命や成長、人生に責任を持つことだと思う」等の親になることの責任や役割に関する項目で構成されていたため、「親になることへの要件」と命名した。第3因子は、「親になることは価値ある立派なことだと思う」「親になることはかけがえのない喜びだと思う」等の親になることに対する価値づけに関する項目で構成されていたため「親になることの意義」と命名した。第4因子は、「親になると自由が制限されると思う」「親になると時間的制約が生じると思う」等の親になることに対する否定的な捉え方に関する項目で構成されていたため、「親になることへの不安感・負担感」と命名した。第5因子、「自分の母親のようになりたい」「母親が育ててくれたように自分の子どもを育てたい」等の実の親をモデルとした子育てに関する項目から構成されていたため、「モデルとしての母親」と命名した。信頼性係数は、表1に示した通り5因子全て0.8

以上であり、十分な値が得られた。

就学前の母子関係尺度 主因子法による因子分析を行った。スクリープロットの固有値の変化より、3因子解が妥当であると考えられた。3因子を仮定して因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、因子負荷量0.4未満の4項目を除外した。因子負荷量0.4未満の項目がなくなるまで因子分析を繰り返し、最終的な因子パターンを決定した。因子別の項目は先行研究とほぼ同様であったため、第1因子「安定型」、第2因子「回避型」、第3因子「アンビバレント型」とした。

幼少期から青年期へのIWMの変容タイプの分類

IWMの特徴によるタイプ分けを行うため、幼少期と青年期それぞれのIWM得点を用いてward法によるクラスタ分析を行った。

幼少期 3クラスターが抽出された。各クラスターの特徴をみるため、3つのクラスターを独立変数、愛着スタイル(安定型・アンビバレント型・回避型)を従属変数とする分散分析を行った。その結果、安定型($F(2, 212) = 125.195, p < .001$)、アンビバレント型($F(2, 212) = 118.587, p < .001$)、回避型($F(2, 212) = 31.562, p < .001$)が有意であった。結果を表2に示す。

多重比較の結果、安定型は第1クラスターと第2クラスターが第3クラスターより有意に高いことが示された。アンビバレント型では、第2クラスター、第3クラスター、第1クラスターの順で得点が高かった。回避型では、第3クラスターが第1クラスターと第2クラスターより得点が高かった。

結果から、安定型が高く、アンビバレント型と回避型が共に低い第1クラスターを「安定型(ポジティブ群)」、安定型とアンビバレント型が共に高く、回避型が低い第2クラスターを「安定・アンビバレント高群」、安定型が低く、アンビバレント型と回避型が共に高い第3クラスターを「アンビバレント・回避高群(ネガティブ群)」とした。

青年期 幼少期と同様に3クラスターが抽出された。各クラスターの特徴をみるため、3つのクラスターを独立変数、愛着スタイル(安定型・アンビバレント型・回避型)を従属変数とする分散分析を行った。その結果、安定型($F(2, 212) = 68.76, p < .001$)、アンビバレント型($F(2, 212) = 121.889, p < .001$)、回避型($F(2, 212) = 96.744, p < .001$)が有意であった。結果を表3に示す。

多重比較の結果、安定型は第1クラスターと第2クラスターが第3クラスターより有意に高いことが示された。アンビバレント型では、第3クラスター、第1クラスター、第2クラスターの順で得点が高かった。回避型は、第2クラスターが第1クラスターと第3クラスターよりも得点が高かった。

結果から、安定型が低くアンビバレントが中程度で回避型が低い第1クラスターを「アンビバレント中群(ネガティブ群)」、安定型が低く、アンビバレント型と回避型が共に高い第2クラスターを「アンビバレント型・回避高

表 1 親性準備性尺度の因子分析結果

	因子負荷量				
	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子: 子どもへの興味・関心(9項目, $\alpha = .92$)					
1 幼い子どもと遊ぶのが好きだ。	.102	.09	-.35	.10	.09
24 幼い子どもの姿をついで追っていることがある。	.97	-.04	-.12	-.01	-.02
8 幼い子どもに関心がある。	.95	-.14	.08	.03	-.02
39 子どもをあまり好きではない(R)	.91	-.01	-.09	-.02	.02
43 小さい子どもと関わることは自分に向かないと思う。(R)	.89	.06	-.14	-.04	.00
18 幼い子どもを見ると微笑んだり、興味を示したくなる。	.80	-.09	.16	.07	-.04
12 幼い子どものこころの動きに興味がある。	.63	-.13	.11	-.01	-.13
34 幼い子どもが泣いていると、何とかしたいと思う。	.54	.17	.19	.04	-.17
30 子どもとはおもしろい存在だと思う。	.52	.12	.06	.08	-.07
第2因子: 親になることへの要件(9項目, $\alpha = .85$)					
32 親になることは子どもに愛情を持ち大切に育てることだと思う。	-.17	.97	-.06	-.09	-.10
38 親になることは子どもの命や成長、人生に責任を持つことだと思う。	.06	.78	-.18	.03	.11
15 親になることは子どもの成長を見守り支えになることだと思う。	.03	.65	.03	-.04	.07
29 親になると子育てを放棄してはいけないと思う。	-.09	.60	-.10	.13	-.02
7 親になると子どもを尊重する気持ちが必要であると思う。	.22	.59	.04	.01	-.13
16 親になったら子育てについて学んでいく姿勢が必要であると思う。	-.06	.54	.31	.01	.05
20 親になることは子どもを守ることだと思う。	.08	.50	.27	-.01	-.04
27 親になることは子どもの成長を楽しみ、幸せを感じる事だと思う。	.22	.42	.17	-.17	.11
27 親になるためには優しさや気遣いが必要であると思う。	-.02	.40	.20	-.17	.00
第3因子: 親になることへの意義(7項目, $\alpha = .94$)					
40 親になることは自分自身も成長する機会を得ることだと思う。	-.11	.01	.80	-.05	.04
44 親になることは自分の学習の機会を得ることだと思う。	-.08	.03	.79	.04	-.17
35 親になることは価値ある立派なことだと思う。	.05	-.08	.68	.02	.14
19 親になることはかけがえのない喜びだと思う。	.26	-.08	.59	-.08	.14
13 親になることは生き甲斐を得ることだと思う。	.33	.02	.53	-.10	.00
23 親になることで新しい人生観・価値観を得ると思う。	.02	.17	.49	-.12	.10
41 親になるためには常識を持ち、世間を知ることが必要であると思う。	-.16	.21	.43	.15	.08
第4因子: 親になることへの不安感・負担感(6項目, $\alpha = .80$)					
33 親になると自由が制限されると思う。	.22	-.01	.00	.90	.07
22 親になると時間的制約が生じると思う。	.07	.03	.01	.67	.12
42 親になることに漠然とした負担感を抱く。	-.16	.07	-.06	.61	.03
28 親になることに漠然とした不安を感じる。	.01	.14	-.08	.61	.03
37 親になると自分を抑制することが求められると思う。	-.04	.02	.36	.56	-.14
11 子育ては孤独な仕事だと思う。	-.08	-.07	-.05	.42	-.04
第5因子: モデルとしての母親(3項目, $\alpha = .80$)					
3 自分の母親のようにになりたい。	-.05	-.15	.05	.17	.87
14 母親が育ててくれたように自分の子どもを育てたい。	.01	.01	.02	.00	.87
26 母親についての思い出がありません(R)	-.17	.13	-.04	-.08	.72

表 2 幼少期 IWM タイプ別の愛着得点の分散分析結果 (平均と SD)

	第1クラス (n=41)		第2クラス (n=108)		第3クラス (n=66)		F値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
安定型	4.03	(0.28)	4.12	(0.28)	3.35	(0.40)	125.20 ***	第3クラス<第1クラス 第3クラス<第2クラス
アンビバレント型	2.25	(0.34)	3.60	(0.58)	2.73	(0.53)	121.89 ***	第1クラス<第3クラス<第2クラス
回避型	2.19	(0.46)	2.33	(0.34)	2.77	(0.53)	118.59 ***	第1クラス<第3クラス 第2クラス<第3クラス

*** $p < .001$

表 3 青年期 IWM タイプ別の愛着得点の分散分析結果 (平均と SD)

	第1クラス (n=70)		第2クラス (n=72)		第3クラス (n=73)		F値	多重比較
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
安定型	2.62	(0.50)	2.78	(0.73)	3.69	(0.51)	68.76 ***	第1クラス<第3クラス 第2クラス<第3クラス
アンビバレント型	3.15	(0.45)	3.44	(0.40)	2.33	(0.48)	121.89 ***	第3クラス<第1クラス<第2クラス
回避型	2.08	(0.44)	3.12	(0.53)	2.13	(0.55)	96.74 ***	第1・第3クラス<第2クラス

*** $p < .001$

群（ネガティブ群）、安定型が高く、アンビバレント型と回避型が共に低い第3クラスタを「安定型（ポジティブ群）」とした。

IWMの変容タイプ分類 上記の幼少期および青年期のクラスタ分析の結果を表4にまとめた。幼少期にポジティブな母子関係だった人（以下Poと表記）の内、青年期もポジティブな母子関係だった人（Po）は11名だった（幼少期Poから青年期Poへ変容したタイプ：以下Po→Poと表記）。一方、幼少期Poで青年期ネガティブな母子関係だった人（以下Neと表記）は31名（以下Po→Neと表記）だった。

反対に幼少期Neで青年期Poの人は31名（Ne→Po）であり、幼少期Neで青年期Neの人は32名（Ne→Ne）だった。なお、幼少期の母子関係が「安定・アンビバレント高群」は105名と人数は多いが、PoとNeへの分類が困難なため、本研究では分類の対象から除外した。

IWMの変容タイプにおける親性準備性の差の検討

IWMの4つの変容タイプによって親性準備性に差があるかを検討するために、IWM変容タイプを独立変数、親性準備性得点を従属変数とする1要因4水準の分

散分析を行った。その結果、「子どもへの興味・関心」以外は全て有意差が得られた。「親性準備性全平均」($F(3, 101)=6.09, p < .01$)、「親になることの要件」($F(3, 101)=5.59, p < .01$)、「親になることの意義」($F(3, 101)=3.16, p < .05$)、「親になることへの不安感・負担感」($F(3, 101)=2.95, p < .05$)、「モデルとしての母親」($F(3, 101)=10.66, p < .001$)であった。結果を表5に示す。

多重比較の結果（TukeyのHSD検定）、「親性準備性全平均」は、Po→NeがNe→Neより有意に高く、Po→PoがNe→Neよりも有意に高い傾向、Ne→PoがNe→Neよりも有意に高い傾向であった。「親になることの要件」では、Po→NeがNe→NeとNe→Poより有意に高かった。「親になることへの意義」ではPo→NeがNe→Neより有意に高かった。「親になることへの不安感・負担感」ではPo→PoがNe→Poより、Ne→PoがNe→Neより有意に高い傾向にあった。「モデルとしての母親」では、Po→PoがNe→PoとNe→Neよりも、Po→NeがNe→PoとNe→Neよりも有意に高かった。

表4 IWMの変容特徴による群わけ

幼少期IWM	青年期IWM	人数	以下の表記
ポジティブ（安定型）	ポジティブ（安定型）	11	Po→Po
	ネガティブ（アンビバレント中群/ アンビバレント・回避高群）	31	Po→Ne
ネガティブ （アンビバレント・回避高群）	ポジティブ（安定型）	31	Ne→Po
	ネガティブ（アンビバレント中群/ アンビバレント・回避高群）	32	Ne→Ne
未使用 （安定・アンビバレント高群）		105	

表5 IWM変容群別の親性準備性得点

	Po→Po(N=11)		Po→Ne(N=31)		Ne→Po(N=31)		Ne→Ne(N=32)		F値	多重比較
	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)	平均	(SD)		
親性準備性全平均	4.08	(0.43)	4.14	(0.50)	3.95	(0.36)	3.67	(0.49)	6.09	** Po→Ne>Ne→Ne
子どもへの興味・関心	3.89	(1.24)	4.00	(1.37)	3.97	(0.96)	3.64	(1.29)	0.56	n.s
親になることの要件	4.44	(0.45)	4.66	(0.35)	4.34	(0.50)	4.18	(0.54)	5.59	** Po→Ne>Ne→Ne Po→Ne>Ne→Po
親になることへの意義	4.15	(0.65)	4.26	(0.79)	4.05	(0.47)	3.72	(0.13)	3.16	* Po→Ne>Ne→Ne
親になることへの不安感・負担感	3.47	(0.83)	3.68	(0.65)	4.06	(0.56)	3.63	(0.83)	2.95	*
モデルとしての母親	4.45	(0.62)	4.14	(0.85)	3.34	(0.87)	3.18	(0.97)	10.66	*** Po→Po>Ne→Po.Ne→Ne Po→Ne>Ne→Po.Ne→Ne

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

<考察>

IWMの変容について

IWMが幼少期から青年期へ変化した人は、半数いることがわかった。幼少期に形成された愛着スタイルが青年期にも影響することが指摘されているが (Bowlby, 1969)、幼少期の関係が不安定な場合でもIWMが変容することを示す先行研究もある (内田, 2014・小池, 2013)。本研究では、幼少期の関係が不安定な場合でもIWMが変容することを示す先行研究と同様の結果が示された。これより、母親以外の様々な人間関係の中で愛着は変容できるといえるだろう。しかし、変容はポジティブな変容ばかりではない。幼少期がポジティブ群で青年期にネガティブ群に変容するタイプ (Po → Ne) は、その反対のタイプ (Ne → Po) と同数であった。青年期は自我同一性の確立の時期にあり、心理的に様々な葛藤状態にある。それゆえ、一時的に対人関係が不安定になりネガティブに変容する可能性もあり、幼少期ポジティブ群から青年期ポジティブ群への変容 (Po → Po) の割合が少ないと考えられる。また幼少期と青年期に継続してネガティブな群もみられた (Ne → Ne)。母親との関係において問題をもつ者は母性的なかかわりをもってくれる年長者に信頼をよせることが指摘されている (山岸, 2009)。Ne → Ne タイプは、今後そのような出会いがあればポジティブに変容する可能性もあるのではないだろうか。

なお、幼少期ポジティブ群は42名、ネガティブ群は63名と幼少期のネガティブ群が多いことが分かった。本研究は振り返り調査のため、幼少期の母親との関係について現在の捉え方が影響した可能性も考えられる。

IWM変容タイプの特性

Po → Po タイプ この群は「親になることへの不安感・負担感」を持ちにくく、「モデルとしての母親」を持ちやすい特徴がある。これより、幼少期・青年期ともに安定型の人たちは、親になることに不安や負担をあまり抱いておらずに自分の母親をモデルとした親性準備性が高いことが伺える。幼少期の母親との関係を振り返った時に、愛着関係があったと認識する人ほど女性性や親になることをより受容しており、母親への心理的同一化もより高く認められることが指摘されている (久保田ら, 1999)。Po → Po タイプは、自分の母親から受けた母子関係を振り返り、当時の母親と同一化しながら自身の育児に対する価値観を構築しているタイプと考えられる。

また、「親になることへの要件」や「親になるための意義」は他のタイプと差がなかった。これより、親として「こうあるべき」といった気持ちは、他のタイプより高いわけではないといえる。母子関係にネガティブな経験がないために、理想の親像を過剰に描くことなく程よい親性準備性を備えていると考えられる。

Po → Ne タイプ 親性準備性全因子の平均得点がNe

→ Ne タイプよりも高く、4タイプの中で最も高いことが特徴である。因子別では、「親になることへの要件」はPo → Po タイプと差がなく高い。また、「親になることへの意義」は、Ne → Ne タイプよりも得点が高く、その他のタイプとは差がない。これより、このPo → Ne タイプは青年期にIWMがネガティブに変容しているが、「親になることへの要件」と「親になることへの意義」がPo → Po タイプと変わらず高く親性準備性が保たれているといえる。しかし、現在ネガティブな人間関係を有していることも事実である。

青年期のIWMがネガティブに変容した要因には、幼少期から青年期に至るまでに家庭内の変化や対人関係の影響などIWMがネガティブに変容する何らかの要因があった可能性が考えられる。ただし、幼少期に良好な母子関係を体験しているため、現在 (青年期) のIWMがネガティブであっても、自分が親になることを考える際に幼少期のポジティブな経験が支えとなり「親としてこうありたい」という思いをしっかりと持てる可能性があり、そのことが結果に反映されたと考えられる。

Ne → Po タイプ このタイプは、Ne → Ne 群と比べて親性準備性の全因子平均得点が高かった。幼少期のIWMは、両群ともネガティブであるにも関わらず、その後の青年期のIWMがポジティブに変容することができれば、変容しない場合に比べて親性準備性が形成されることが示された。しかし、「親になることへの不安感・負担感」ではどのタイプよりもNe → Po タイプの不安感が高いことも明らかとなった。これは、幼少期に安定した母子関係の経験が少ないために、親になりたい気持ちはあってもそのモデルがないため、より不安や負担を感じやすいことを示していると考えられる。加えて「モデルとしての母親」の得点もこのタイプは低い。幼少期の自身の母子関係のモデルはネガティブなものであり、良好なモデルとなる母親の不在が親になることへの不安感・負担感を高める要因になっている可能性が示唆される。

以上より、Ne → Po タイプの親性準備性を高めるためには、不安感・負担感を軽減することが重要になるであろう。IWMにポジティブな変容をもたらす人との出会いや経験がこのタイプには不可欠になってくる。また、「モデルとしての母親」が形成されにくいいため、実際に子どもを育てる際には、様々な困難に出会う可能性がある。児童虐待や育児ノイローゼ等の危険性があることも考慮しなければならない。しかし、Ne → Ne 群と比較した場合、親性準備性が形成される面も見出された。不安感・負担感の高さは、子育てを行う上でリスクに気づく可能性でもあり、援助要請を発信できる可能性を有しているともいえる。このタイプに対する援助は、①子育て支援事業等のサポート源へのアクセスの仕方、②モデルとしての母親がいないことへの不安へのサポート (具体的な介入) が大事になるといえる。

なお、その他の項目は他のタイプと差がなかったこと

から、「青年期にIWMが安定型に変容した場合、親性準備性を構成する因子の内、いくつかの得点が低い」という仮説は支持された。

Ne → Ne タイプ 親性準備性全因子平均得点、親性準備性5因子全てにおいて親性準備性が低いことが明らかになった。つまり、親になることへの期待や認識、価値観が最も低いといえる。このタイプの者も将来親になる可能性がある。親にならない場合でも、社会全体で次世代を育成していくにあたって困難が生じることが予想される。特に「親になることへの不安感・負担感」が低く、親になることへの意識の乏しさが明らかであることから、問題の認識を持ちにくく本人が“困り感”を持っていないがために、他者に助けを求めることが困難なタイプと考えられる。そのため、Ne → Neタイプに対しては成人後のIWM変容に影響を与える他者との出会い、そのことを意識したサポート的な援助が一層必要になると考えられる。

以上より、「幼少期のIWMが青年期において安定型に変容しない場合、全般的に親性準備性が低い」という仮説は支持された。

＜まとめと今後の課題＞

IWM変容タイプと親性準備性との差を検討した結果、「子どもへの興味・関心」に差がなかったことから、どの群にあっても青年期における子どもに対する興味・関心は変わらないことがわかった。しかしながら、4つのIWM変容群にはそれぞれに特徴があり、子どもと関わることだけでは親性準備性が育たないことが本研究から示唆された。本研究は、青年期を対象とした研究であったが、親性準備性を育てることは、子どもへの学校教育、妊婦に対しては産科や保健所などでの心理教育にて行うことができるであろう。特にIWMが幼少期にネガティブである場合、世代間伝達の影響も考えなくてはならない。

本研究では、IWMが幼少期にネガティブであっても、その後のIWMが安定型に変容することによって、親性準備性の一部が形成される可能性が示された。その一方で養育者のIWMと同質のアタッチメントの世代間伝達の実証されている（数井、遠藤、田中ほか2000）ことも事実である。そのため、特に幼少期のネガティブ群は、重要な他者、「自分を認めてくれる存在」との関わりでIWMをポジティブに変容することが必要であり、アタッチメントの悪循環を断ち切ることを意識した他者の支援や関わりがより大切になってくると考えられる。これは青年期からではなく、学校教育から始められることであり、予防的な視点からの支援が重要になるであろう。例えば、学校現場であればクラス担任を子どもが「自分を認めてくれる存在」であると思い、担任との関わりで「気持ちが安定」する経験をするなどである。これら

の体験がIWMの変容につながり、親性準備性を支える力になると思われる。また、臨床場面では養育者の幼少期のネガティブな母子関係を援助者との関係の中で修正する修正体験がIWMの安定につながるであろう。さらにモデルとしての母親がいない場合、親としての良いイメージを抱くことが難しいと予想されるため、具体的援助を行い、母親モデルを示すことが世代間伝達の防止につながるのではないだろうか。虐待に関する調査では、一貫して実母による虐待が全体の60%を占めていることから（長谷川、2008）、スクリーニング調査などでできるだけ早期に母親に合った適切な支援を行う環境設定が大切になると考えられる。

本研究は青年期女子を対象にしていたが、男性も親になり次世代を育成していく立場であるため、今後は男性を含めた一般の若者を対象に行い、今回の結果と比較する必要があるだろう。

引用文献

- 青柳肇・酒井厚（1997）. アダルトアタッチメントと階層による幼少期のアタッチメントとの関係 早稲田大学人間科学研究 10, 7-16.
- Bowlby, J. (1969). Attachment and loss: Vol.1. Attachment. New York: Basic Books. (黒田実郎訳 1976. 母子関係の理論1: 愛着行動 岩崎学術出版)
- Hamilton, C.E. (2000). Continuity and discontinuity of attachment from infancy through adolescence. *Child Development*, 71, 690-694.
- 長谷川博一（2003）. たすけて！私は子どもを虐待したくない 世代連鎖を断ち切る支援 径書房
- 服部律子（2008）. 親準備性尺度の試み 思春期学 26（4）, 428-432.
- 平田伸子（1999）. 親準備性への支援 リプロダクティブ・ヘルツ/ライツの視点から 九州大学医療技術短期大学部紀要, 26, 73-78.
- 五十嵐南奈（2011）. 女子大生における「親準備性」と両親の養育態度 聖心女子大学 臨床発達心理学研究 10, 58-71.
- 伊藤葉子（2003）. 中・高校生の親性準備性の発達 日本家政学会誌, 54（10）, 801-812.
- 岩田崇・秋山康子・井上義明・深谷和子（1982）. 青年期の親準備性二関する研究 昭和57年度厚生省心身障害研究報告書, 466-467.
- 川瀬隆千（2010）. 大学生の親準備性に関する研究 宮崎公立大学人文学部紀要 17（1）, 29-40.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹（2000）. 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究, 48（3）, 323-332.
- 厚生労働省（2014）. 平成25年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数等 <http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-1190-1000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/000053235.pdf>
- 厚生労働省（2011）. 児童虐待関係の最新の法律改正について <http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2011/07/02.html>

- 久保田まり・渡辺恵子 (1999). 心理的親準備性から親性への移行に関する発達的研究—対児感情と母性意識、幼少期の愛着関係の認識との関連— 昭和大学教養学部紀要, **30**, 21-33.
- 小池優美 (2013). 青年期女性の親性準備性と就学前及び成人期の愛着スタイルとの関連 日本女子大学人間社会研究科紀要, **19** (3), 99-113.
- 諸井克英・木村有花・長井佐哉香・堺かおる・西田郁美 (2013). 親との接触経験が親準備性傾向の形成におよぼす影響—女子青年の場合—同志社大学 学術研究年報, **64**, 71-81.
- 中嶋律子・後藤宋理 (2009). 青年期の親準備性—子育て経験者との比較—名古屋市立大学看護学部紀要, **8**, 9-15.
- 西田郁美・諸井克英 (2010). 親性準備性尺度の作成 生活科学同志社女子大学, **44**, 39-44.
- 岡本祐子・古賀真紀子 (2004). 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関する要因の分析 広島大学心理学研究, **4**, 159-172.
- 酒井厚 (2001). 青年期愛着関係と就学前の母子関係：内的作業モデルの試み 性格心理学研究, **9**, 59-70.
- 瀧川郁美・中見仁美・桂田恵美子 (2012). 大学生の親性準備性と乳児の鳴き声に対する反応 関西学院大学臨床教育心理学研究, **3** (38), 39-44.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1998). 愛着理論から見た青年の対人態度 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- 田邊恭子・米澤好文 (2009). 母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達—母親像に着目した子育て支援への提案—和歌山大学教育学部実践総合センター紀要, **19**, 19-28.
- 寺尾絢美 (2012). 青年期における「親準備性」に関連する要因 聖心女子大学臨床発達心理学研究, **11**, 3-17.
- 鵜飼奈津子 (2000). 児童虐待の世代間伝達に関する一考察—過去の研究と今後の研究— 心理臨床学研究, **18** (4), 402-411.
- 内田利広 (2014). 内的作業モデルの児童期から青年期における変容—重要な他者という観点から— 京都教育大学紀要, **125**, 117-130.
- 山岸明子 (2013). 青年期に記述された生育史の良好さと成人期の適応との関連—内的作業モデルを手がかりにして— 青年心理学研究, **25**, 29-43.

注1 元福岡女学院大学人文科学研究科臨床心理学専攻大学院生